

氏 名	おおもりまさき 大 森 正 樹
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論文博第 405 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	エネルギーと光の神学 ——グレゴリオス・パラマス研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 本 耕 平	教 授 片 柳 栄 一	助教授 川 添 信 介
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は後期ビサンティンの神学者グレゴリオス・パラマス（1296—1359）の思想を神学の領域を超えて、人間の普遍的な神認識の問題として考察したものである。

まず序論において「グレゴリオス・パラマスの生涯と著作」が紹介され、続く第一部において「東方神学の特質」が考察されている。アトス山で修行を積んだパラマスは、人間は理性的理解によって神を把握するのではなく、むしろ修徳（ascetism）によるべきであると考え。それゆえ神学学習もまた哲学的修練を基礎とするよりは、修徳的経験に基づいて学ばれるべきであり、神学は霊的修行の結果である霊性の上に築かれるべきものと見なされている。しかし、パラマスは一般的に哲学の価値やその営みを蔑するわけではない。哲学そのものの価値は認めるが、それは神と一致したいと願う修道士の修行には有用なものとは考えられていないということである。修道士は毎日の弛みない祈りの営みを通して神に近づく存在だからである。しかしパラマスの論敵バルラーム（1290頃—1350）は、彼自身、正教会の修道士ではあるが、イタリアのカラブリアに生まれ、そこで西欧的・スコラ的教育を受けたため、パラマスとは異なる視点を有していた。彼は神へ至る道として、理性による把握を何より有用なものとしていたのである。パラマスはこの考えにいわば反哲学的態度をもって徹底的に反対する。

パラマスが哲学的方法論に反対する理由は、パラマスが依拠する東方神学の性格にあることが指摘される。東方神学は、既に述べたように、哲学的思惟がその基礎にあるのではなく、日々のキリスト体験（修徳）に基礎を置き、ついには人間が神化されることを目標としている（人間神化の道）。そしてこの神化は一つの神学的方法とも言うべき、アポファティズム（否定神学）にその基礎を置いている。ただしここでパラマスの言う否定神学は、己を主張してやまない人間の自己を否定するというあくまで自己否定的な意味合いのものであって、単に肯定神学に対立する意味のものではない。否定神学そのものは長い東方の伝統の中で育成されたいわば東方神学の柱であり、いくらか否定神学的手法を用いるがそれが主流を占めなかった（西方）カトリック神学との分岐点でもある。東方の意識からすれば、否定神学の精神は、旧約聖書に見られるシナイ山におけるモーセと神の出会いに根源的・端的な仕方では表明されているものである。

光と闇の中での神とのこの出会いは、東方の神学者を大いに惹きつけた。シナイ山でのモーセのこの体験と新約聖書に登場するキリストのタボル山上での変容は、彼らによって比較検討された。その代表的な神学者としてクリュソストモスやニュッサのグレゴリオス等がいる。彼らの残した著作を通して、東方神学の特質はある程度明確に把握することが可能である。パラマスの仲間であるアトス山の修道士が実践し、パラマス自身もその伝統のうちに深く身を置く「ヘシカズム」（静寂主義）では、神と人とのパーソナルな関係に重点が置かれる。この神との親密な交わりを尊ぶ霊性は、理論的神学がややもすれば陥りがちになる精神的動脈硬化を防ぐことのできる有効な手段である。

さらにヘシカズムを信奉するヘシカストはイエスの名を呼びながら、祈りに潜心するが、このイエスを渴望しつつその名を呼ぶことは、神の知恵への欲求、つまりソフィアなるキリスト（「キリスト＝ソフィア」）を渴望することにもなる。ヘシカストの弁護にあたったパラマスの仕事はある意味で、日常的言語を駆使しながら、神の知恵をもたらしてくれるキリスト

にいかにしてアプローチしうるかを説くことであり、その語り口や語りの言葉は、日常性を超えて、非日常的な霊的言語へと上昇していく性格のものだったのである。

第二部において「エネルゲイア論」が詳説される。神のうちにそのウーシア（本質）とエネルゲイア（働き）とを区別するパラマスの思想は永きにわたって東方の神学者からも西方の神学者からも問題にされ、討議されてきた。そこでまず最初に M. ジュジー、B. シュルツェ、V. ロースキイ、Ch. ヤンナラスや D. コフィーといった研究者たちの見解が概観され、しかるのちにそれが吟味検討されている。ジュジーは、パラマスが神のうちにウーシアとエネルゲイアを区別することによって、神は何か複合的なものであるという印象を人に与え、神の単純性に反し、神のペルソナとの交わりを想定しないかのような説は汎神論に陥る危険性があり、この世での見神は不可能であると反論し、シュルツェはパラマスの論法に一種の超越的論理学を見、それは神の曰く言い難さを表現するのに必ずしも必要ないと反論する。またジュジーとシュルツェは、パラマスが神のうちにそのウーシアとエネルゲイアを実在的に区別したと考える点で一致している。しかしながらパラマスのテキストにおいて、「実在的に」という意味をもつ言葉は見いだされない。これに対し、ロースキイやメイエンドルフといった正教会側の学者たちは実在的区別ということ語らず、特にロースキイは、ウーシアやエネルゲイアということでパラマスが言わんとしたことは、神の曰く言いがたい様態であった、とシュルツェとは逆に主張する。次いでグイシャルダンは、スコラ的吟味の結果、パラマスは単に神の不可分性を述べているだけであって、神の単純性は問題にしていけないと言う。その上、パラマスの思想は哲学的とは言い難く、まったく非哲学的であるとさえ断言する。

またイヴァーンカのパラマス研究によると、現今のパラマス主義者は、パラマスが使うエネルゲイアという言葉は、教父たちの考えていたことと符合すると言っているが、必ずしもギリシア教父はパラマスと同じ意味でこの言葉を用いたのではない、ということになる。ただしパラマス主義者たちがパラマスの思想を解明するのに用いる「二律背反」という言辭は神の表現不可能な現実を表す有効な手段であることは認めている。

こうした諸研究者の見解に触れた後、パラマスその人の著作が問題とされる。その結果明らかになったことは、神のうちにウーシアとエネルゲイアを区別するというこの考えは、パラマスの哲学的思惟の結果ではなく、アトス山での修道士たちの霊的修行から生まれた経験や、それ以前の多くのキリスト教神秘家のそれを説明するためのものであり、パラマスに哲学や神学の区別という意識はなかったということである。神秘体験の深い実相を説明するには、人間の言語は不完全極まりない。そういう条件を付けた上で考えるなら、パラマスたちの採った方法は、唯一のものではないにしても、最良の部類の一つであろうと考えられている。

さてパラマスの思想を伝える神学的用語のうちで重要な言葉が三つある。すなわち、エネルゲイア、ヒュポスタシスそしてエンヒュポスタトスである。パラマスはこれらの用語をギリシア教父の伝統に則って使用していることを本論文は明らかにし、またこの用語を正確に解することが真のパラマス理解につながっていくことが強調されている。

ところでパラマスが神のうちにウーシアとエネルゲイアの区別をすることは、あくまで神学的思索の結果であるとしても、しかしこうした言葉はすでにギリシア哲学で用いられていたものである。従ってこれらの語を採用した経緯の裏には、それまでの哲学の流れが予想される。そういう予測のもとにアリストテレス、プロティノス、プロクロス、フィロンなどの古代の哲学者、そして擬ディオニュシオスやダマスケヌスといったキリスト教著作家の重要な作品を取り上げて検討されている。その結果、パラマスはこうした先人の思惟の上に彼の理論を築いていることが明らかにされている。

第三部において「人間の神化と光の神学」が論じられている。ヘシカズムにおいては「光」もまた、人間が神との一致へ向けて歩んでいくための重要な位置を占めている。ここでは神の光と人間の神化との関係に照準を合わせて論じられている。その結果、神化は神の人間への愛の働きによるものであり、神の恵みであり、人間の側からの絶えざる祈りの結果であることが明らかにされている（勿論神化は超越的な神と等しくなることではない）。神と一致するための重要な道は祈りであることは当然であるが、東方教父によれば、人をして祈りへ突き動かす原動力とも言うべきものは、むしろ人間の魂の情念的部分にある。彼らによれば、人間は情念の力の虜となりやすいが、この「魂の情念的部分」はヘシカズムの修行によって浄められれば、情念のエネルギーはかえって人をして真直ぐに神へと向かわせるものになりうるのである。この神へと向かう力はギリシア教父によって霊的感觉とも言われている。

次いでこの霊的感觉の真の意味がオリゲネスにまで遡って探求されている。それによって身体の重要な位置づけが次第に

明らかになっている。東方靈性では身体は単に肉的な情念に傾斜していくような、修行の邪魔をするものではない。神の恵みは身体にも、霊にも、等しく作用する。つまりパラマスは霊と身体の調和を図り、反グノーシス的な身体・感覚の復権を唱え、霊的感觉を一種の認識論と見ていることが指摘されている。

この神の恵みの一つは神の光であるが、光に照らされることは、把握困難な神を人間が把握しているという一つの印ともみなされる。それをいわば理論的に支えている論理が否定神学である。しかしパラマスによれば否定神学そのものは人間の目標ではない。否定神学と言う以上、それはあくまでも神学という学であって、学たるかぎりにおいて、人間の理性の範囲にとどまらざるをえない。そこでむしろこの否定神学を乗り越えていくことが提唱され、目指すべきは、人間が、絶えざる祈りを媒介にした観想の行為の中で己を蔑して神に出会うことであるとされる。

しかしこれまではパラマスの非哲学的態度や哲学用語の使用の不十分さから、パラマスには一貫した哲学・神学体系や論理はないと非難されてきた。パラマスの用いた言葉の表面をただ撫でているだけでは、このような批判が出てくるのは当然であると考えられる。それではパラマスの真意は不明のままに留まるであろう。しかしパラマスは全く支離滅裂な非論理的なことを言っているのではない。一見して論理のないと思われるパラマスの発言にも、パラマスなりの論理は隠れているのであって、それこそが見出されねばならない。このことはまたキリスト教神秘主義の中でのパラマスの位置を十分に理解する上でも重要なことである。

第四部において「神のエネルゲイアと光の神学—東方の論理に向けて」が結論として述べられている。これまでの考察から、問題は神のエネルゲイアとは何であるか、パラマスは神の光との関連でエネルゲイアをどう考えているか、神のウーシアとエネルゲイアの区別の問題や、人間神化などを正当に説明しうるパラマスに固有の論理は一体あるのだろうか、等である。彼の意図は通常東方では最高の営みとされてきた否定神学を超えていくことであり、この否定神学を凌駕していくところにその論の出発点もまたあったのである。この態度と方法論は超否定神学と呼ばれうるものである。パラマスの著作を繙いて、それを虚心坦懐に読めば、そこに立ち現れてくるものは、否定を止揚した上で、例えば、神は「一」でありながら、また「多」でもある（神には一なるウーシアと多なるエネルゲイアがあり、また神のウーシアは一だが、父と子と聖霊というヒュポスタシスは三という多である）という逆説的思考である。従って、パラマスにあっては、神において「一」と「多」が同時に成立していたのである。これをパラマスの論理と呼ぶなら「一」と「多」が同時的に成立する論理をパラマスは提唱した、と推測することができる。こうした筋道の立て方は、ビザンティン世界を含む、いわば「東方の論理」である。この論理は、ある意味でセムの宗教の思惟方法と一致するところが多いと考えられている。イスラームやユダヤの宗教哲学はそのうちに存在と論理のダイナミズムを含み、神学と哲学は分離されていない。この意味で、西方キリスト教の思惟とは異なる様相を示しているからである。以上の考察によってパラマス研究に今や新しい視点が加わったことが明らかにされている。それはイスラームやユダヤの思想を考慮しつつ、それらとパラマスの思想や東方教会の思想とを共時的に研究することである。これは多大の時間と多数の研究者の協力を必要とするが、けっして不可能な試みではない。本論文はそのことの示唆をもって終っており、それを論者自身の次の大きな研究課題と位置づけている。

論文審査の結果の要旨

14世紀のギリシア正教会の神学者、神秘思想家グレゴリオス・パラマスはヘシカズムを神学的に体系化し、それを東方キリスト教会において不動のものにした人物である。キリスト教の修道生活は紀元三、四世紀にエジプトや中東の砂漠に始まったものである。したがってキリスト教の修道生活は、まず東方教会に発生したとすることが出来る。論者は西方のキリスト教神学が、キリストの人間性を強調するアンティオキア学派を継承し、「ゲッセマネのキリストの苦悩と祈り」（ルカ22・39—46）により共感し、己の内面の洞察に収斂してゆくとみなし、他方東方のキリスト教神学と霊性は神としてのキリストを強調するアレクサンドリア学派を継承し、光輝く神・キリストの姿、即ち「タボル山のキリストの変容」（マタイ17・1—8）に深く感動する、と概括する。このことの含意を解明するために、論者は資料において今日刊行されているパラマスのほぼ全著作を渉猟し、内容の点では、同じく東方教会の神学者でありながら西方のスコラ神学にも通暁し、それにより共感するパラマスとの論争を緻密に検討し、パラマス神学の中心概念、即ち「神のウーシアとエネルゲイアの区別」「ヘシカズム」「神化」「見神」「受肉の意味」「光」等について極めて深い洞察を行っている。論者は現代の龐大なパラマス研究書

を批判的に吟味し、自らの知見をより客観的に提示することに成功している。本論文は「神のウーシアとエネルゲイアの区別」を歴史的、体系的に解明する第一・二部と、「人間の神化と光の神学」を東方神学の特徴と位置づける第三・四部とに大別される。テキストの精緻な実証的探究と論者自身の独自の神学的省察の成果は次の諸点にまとめられる。

- 1) 東方キリスト教神学がその基礎を学的認識とは別の修道靈性、即ち祈りの体験に置いたこと、いいかえると体験による神学の可能性を確立したことを、西方神学との対比において明確にしている。
- 2) 西方教会が人間の「至福」を強調するのに対し、東方教会は「人間神化」を重視すること、即ち神と人間との断絶ではなく、人間が神に似せて造られたことを強調する。この人間神化の思想の根底に「キリストの受肉」という事実のあることを洞察している。
- 3) 「受肉」というキリスト教の中心的教義についての東方教会の解釈を鮮明に描出している。即ち、キリストの業の核心は人間の罪を償うことよりも、むしろ聖霊の働きを通しての世界と人間の再生、再創造、或いは靈化にあることを指摘し、「受肉」は人間が神に成れるという最大の人間賛歌であり、そこに東方神学の健康な樂觀主義が認められる、と主張する。「人間神化」の思想は西欧においては十分に展開されなかったものである。
- 4) パラマスは神のうちにウーシアとエネルゲイアを区別する。神のうちに神性とヒュポスタシスの区別があるが、ウーシアとエネルゲイアの区別は神性の区別である。そしてこうした区別を導入する根本的な理由は神のウーシアは一切の被造物を超絶し、被造物の全く与り得ないものであるのに対し、人間は神のウーシアにではなく、神のエネルゲイアに交わっていることを、論者はパラマスのテキストに即して明かにしている。さらにパラマスのヒュポスタシス、エンヒュポスタトス、アウトヒュポスタトスの用語法を検討し、エネルゲイアはエンヒュポスタトスとみなされ、個的存在そのものではないが、どこまでもリアルなものであって、それなくしては人と神との交わりの成立しえないことを論者は洞察している。ウーシアとエネルゲイアの区別が実在的であるか理念的であるか、といった詮索はパラマスの思惟には無縁であったのである。
- 5) ヘシカズムにおける人間神化の究極の状態において、人間は神からの全く一方的な恵みによって、肉眼の眼で「神を見る」に到る。そのとき神は「光」として見られる。この光がウーシアから区別された神のエネルゲイアである。
- 6) 神化される者は魂と身体との人間全体である。神化において人間の身体が靈化が実現され、「靈的感覺」によって、人間は神のエネルゲイアに触れるのである。東方の靈性において、身体も祈るのであって、身体の聖化が強調されていることに注意を促している。
- 7) 被造物を神化させる光と神のエネルゲイアとは同一のものであり、光としてのエネルゲイアは被造物への神の顕現と見なされる。ウーシアとエネルゲイアは根元としての神においては、同じものでありながら、被造物への現れ、顕現の姿において異なるのであって、この区別が神の単一性を損なうものでないことを指摘している。
- 8) この「光」の中には神的エネルゲイアの充満があり、それに浴することは人間が全的に神の恵みに浸ることである。タボル山上でのキリストの変容は、来るべき世での神の顕現の前触れであり、そのとき人間のみならず宇宙一切が変容し、いわば神の輝きに包まれることが東方神学の核心である、と的確に結論している。

以上の諸点は西方のキリスト教神学において強調されないか、或いは殆ど取り上げられていない思想である。本論文は論者の多年にわたる東方神学研究を集大成した浩瀚なものである。それはパラマスを中心とする東方キリスト教思想史研究において、日本人による最初の本格的な業績であるといってよい。本論文がその知見の確かさと斬新さによって、今後の我が国における東方キリスト教研究にとって不可欠な文献であることは疑問の余地のないところである。とはいえ、本論文にもなお望みたいことがないわけではない。それはパラマスが論争の相手とした神学者バルラアムの思想の叙述がやや不正確、或いは不公平であるということである。論者自身が断っている通り、本論文に提示されているバルラアムの神学思想はパラマスの論争書に引用されているものから再構成されたものであるからである。バルラアムの人物像はバルラアム自身の著作に即してより正確に確定されるべきであろう。バルラアムの哲学、神学の解明はパラマスの靈性理解をより深いものにするであろう。バルラアム思想の解明が本論文の残した課題ということができよう。しかしこうした課題も、本論文の成果が我が国における東方キリスト教思想の研究を飛躍的に高める画期的なものであることを損なわせるものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお平成12年12月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。